

集中講義『光の中に子供たちがいる』から学ぶ <講義3>の収録に参加して

天野佳和（保育士／人間発達研究所運営委員）

私は1980年生まれですので、大津市が呼ぶ『保育元年』（1973年）は生まれる随分と（？）前の話です。職場ではもう“若手”ではない私が生まれる前ですので、どの職場でも、戦後、草創期からの実践の営みについて、当事者の語りを直接聴く機会は少ないだろうと思います。

また、そのような機会に恵まれても、そこから聴き手が何を学ぶか、語り手が何を伝えるかは、両者にとってなかなかの難問です。個人の昔語りにも留めず、その教訓を現在につないで読み解くためには何かカギが必要なのだと思います。

今回の講義では、この難問を解くためのヒントが2つありました。1つは、日本の保育・教育のあり方の歴史の中で「保育元年」がどのような意味をもっていたのか、もう1つは、「保育とは何か」という「根源的な問い」という観点から、「実践的な発達理解」の深まりをたどる、です。

「発達の保障」が提起された近江学園での実践から保育園での障害児保育への経緯や、保育実践を論じる際の課題について学び、様々な角度から子どもや保育実践に光をあてて『今』を見ていくこと、様々な人の協働の中で保育が意味づけられ前進してきたことの大切さを学びました。保育の価値が社会的に注目されている今だからこそ、子どもの側から照らす光を見失わないように、実践を通してそのことを言葉にしていきたいと感じます。

また、「注入主義」と「放任主義」と「発達の保障」についてや、「実践主体」と「発達主体」と「日々の保育を評価する視点」についての考察は、まさに根源的な問いであり、色あせない学びの視点でした。

現在、保育、教育の現場が多様化、多忙化する中で、それぞれの現場では、当時とは質も量も違う（ように感じる）様々な課題と対峙しています。「保育はどこに向かおうとしてるんだろう」「保育ってなんだろう」と感じながら、しつくりとこない気持ち悪さが鬱積している人も多いだろうと思います。「問い」を持って保育に向き合っていく経験を、実践の豊かさにしていきたいと思っています。

講義を通して、約50年前の実践から、これからを拓いていく「主体である自分」を感じる機会になりました。それぞれの地域や職場で、色々な世代が聴き手、語り手となり学びあえる機会が増えてほしいと感じました。

そして、「さまざまな壁の大きさにたじろがれたとき、現場の実践を極める知恵が大きな壁でも穴を穿つことが可能であったこと」を励みにして、「ないものよりも、「あるもの」を大事に」、自分（たち）の保育をこれからにつないでいきたいと思っています。

みなさんも是非ご参加を。お待ちしております。